

琉球大学学術リポジトリ

アクティブ・ラーニングに関する実証的一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2015-09-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牛窪, 潔, Ushikubo, Kiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002007980

アクティブラーニングに関する実証の一考察

牛 窪 潔

研究目的と研究課題

昨今、大学教育に関する質の保証が強く求められており、各大学は学生の、中央教育審議会答申が定義する「学士力」、あるいは経済産業省が打ち出す「社会人基礎力」の養成に取り組んでいる。学士力・社会人基礎力は、ジェネリックスキル（汎用的能力）とも呼ばれており、その効果的な育成方法として、アクティブラーニングが教育現場で注目を浴びている。

アクティブラーニングとは「学生の主体的・能動的な学習」のことである。具体的には、PBL（Project/Problem Based Learning）、グループワーク、ロールプレイング、ケース・スタディ、ディスカッション、プレゼンテーション、等の学習方法を用いることにより、教えられることになれている学生を、自ら考え行動し成果をあげる人材に成長せしめることを主たる目的としている。このような学びを深めるために大切なことは3つある。第一に、常に目的やテーマをもって学問を楽しむこと。目的やテーマとは、社会が求めている「Needs」と自分が成し遂げてみたい「Wants」との接点を意味している。そして目的やテーマを達成するために必要な「Can」、すなわち目的とテーマを達成可能にする資質や能力を高めていくことが学び、つまり成長の本質である。第二に、大いなる興味・関心・好奇心を抱くこと。常に興味と関心と好奇心のアンテナを高く張り、必要かつ有効な情報をキャッチすることは学びには必要である。第三に常に自らの力で考えて行動すること。すなわちオリジナリティの構築と実践である。自分自身の個性、独自性、独創性を高め、目的やテーマに取り組み、その結果得られた結果や成果によって人は成長を遂げることができると考える。

本稿は、近年、琉球大学観光産業科学部にて取り組んできたアクティブラーニングを用いた授業（平成24年度と平成25年度に実施したキャリア開発演習：2年次必修科目、平成22年度・23年度・25年度に実施した英語による専門科目的授業：2年次以上の選択科目）を研究対象として、下記URGCC目標（達成目標）を、どの程度学生が達成し得たかを分析することにより、アクティブラーニングに関する教育的效果を検証することを目的としている。また、平成24年度文部科学省「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」にて取り組んできた「授業改善グループ」の評価も検証の一部として紹介することにする。

注：上述したURGCCとは、琉大グローバルシティズン・カリキュラムのことである。いわゆる学士力・社会人基礎力の養成を主たる目的としたカリキュラムである。琉球大学では21世紀型市民を養成するために、平成24年からこの制度を導入した。観光産業科学部は、すべての提供科目的シラバスの「達成目標欄」に、URGCC目標を掲げ、その理念と基本方針に準じた教育を提供している。以下が7つのURGCC学修教育目標である。

- ①「自律性」、②「社会性」、③「地域・国際性」、④「コミュニケーション・スキル」、
⑤「情報リテラシー」、⑥「問題解決力」、⑦「専門性」

第1章 キャリア教育科目的評価について

1-1. 「産業界GPの授業アンケート1：学生版」の解析結果

2014年1月25日（土）、琉球大学観光産業科学部の新棟-114教室にて、キャリア開発演習の最終授業を行った。授業内容は、日経講座（日本経済新聞を主たるテキストとする業界・企業研究）の成果報告会を開催した。その際に、観光産業科学部2年次の受講生に対して、「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の授業改善グループが作成した「授業アンケート：学生版」を実施した。下記は、定量値の解析結果と自由記入欄の定性的評価を参考に解析結果に対する背景や理由を記した。

なお、本章の分析と考察に使用する研究資料（出典先）は、牛窪『琉球大学キャリア開発演習授業アンケート調査解析結果』2014年、に基づくものである。

1. 今日の授業についてお聞きします。

以下の項目において、1：「全くそう思わない」～4：「とてもそう思う」のうち、最もあてはまるものに○を付けて下さい。

n=48

質問内容	順位	平均値	標準偏差
①その日の授業の目的や到達目標を理解出来た。	3	3.21	0.651
②教員の説明は明確で分かりやすかった。	7	3.17	0.663
③授業の難易度は適切だった。	9	3.04	0.771
④授業は相応しい教材が使われていた。	8	3.13	0.647
⑤学習のために相応しい環境（教室・機器・人数など）だった。	6	3.19	0.741
⑥「みんなが学んでいる」雰囲気があった。	2	3.29	0.771
⑦教員－学生間、学生－学生間のやり取りは十分だった。	3	3.21	0.771
⑧やる気が高まる授業だった。	3	3.21	0.832
⑨授業に対する教員の熱意を感じた。	1	3.51	0.655

資料出所：牛窪潔『琉球大学キャリア開発演習授業アンケート調査解析結果』2014年。

今回の「授業アンケートの解析結果」は、集計した定量的データの平均値と標準偏差を算出し、その事実と原因を、定性的評価（2. 授業について考えをお聞かせください）より分析・考察した。

産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業の授業改善グループでは、授業アンケートの記入データの平均が「3.0」以上を、達成目標値としている。

今回の解析結果では、上図表に示したごとく、9項目すべての満足度が3.0を上回った。その中で最も高い数値を示した評価項目は、「⑨授業に対する教員の熱意を感じた」で、満足度の平均値は3.51であった。キャリア教育の専門家である外部講師を招聘しての授業は、その指導スキルのみならず、実学的教育に対する意欲と情熱が強く感じられる。また、PBL（Project/Problem Based Learning）に基づく授業は、学生の主体性と行動力、そしてモチベーションの喚起に大きく寄与していると判断できる。さらに、実務経験を有する様々な外部講師によ

る、実践的かつ応用的な授業に対する満足度は高く、キャリア教育に対する教員（専門家の講師を招聘）の指導力と熱意は不可欠な要素と言えよう。

その他8つの評価項目については、目標値「3.0」以上はクリアしているが、昨年度のデータとの比較から判断しても、相対的に伸び悩んでいる。その主たる原因を、定性的データ（感想など）から、分析・考察してみた。

学生の感想の中で、最も多く登場したキーフレーズが「大変だった」である。「忙しかった」、「辛かった」、「きつかった」、「時間が無かった」といった感想が非常に多く、本授業が課す学生への負担は、かなり大きかったことが伺える。通常の2単位の授業（90分×15回）と比較すると、授業時間数は補講を含めると約2倍を費やしてきた。本年度は外部講師陣のスケジュールとコスト削減施策を理由に、すべて土曜日に、昼・夜同時開講（昼間主と夜間主との合同）の集中授業（12時50分～17時50分）で対応してきた。

また、台風の直撃で10月5日の初回授業が休講となり、その補講対応でスケジュールがさらにタイトになってしまった。さらに、本授業の集大成たる企業研究の成果報告会に相当する「トライ・ザ・ミッション」の開催も、昨年度は1月下旬に実施したが、本年度は約1ヶ月半早い、12月中旬の開催を余儀なくされた。以上のような理由により、本授業に対する学生の評価が低い値を示していると推察される。

この8つの評価項目については、上位を占めるグループと下位を占めるグループに区分して、それぞれの共通因子について分析・考察してみた。

上位グループは、第2位の「⑥みんなが学んでいる雰囲気があった」と、第3位の「①その日の授業の目的や到達目標を理解出来た」、「⑦教員－学生間、学生－学生間のやり取りは十分だった」、「⑧やる気が高まる授業だった」、以上4つの評価項目であった。学生の定性的データ（この授業の良い点・好きなところ、授業の工夫を感じるところ、感想など）から判断すると、チームによる取り組みやグループワークの手法を用いたことに対する前向きな評価が非常に多かった。「グループワークを進めることで自分の強み・弱みを発見できた」、「グループワークにより全員の意識が高まった」、「チームで頑張れ、達成感を得られた」、「チームでなければミッションを完遂できなかった」等、チーム活動による成果を殆どの学生が実感している。

さらに目標管理の充実と自己成長を指摘する学生も非常に多く見受けられた。一例としては、「自分で考えて動く大切さと自己成長を実感できた」、「自分で考えながら行動する大切さを知った」、「社会と自分自身を結びつけ考えることができた」等、3現主義（現場・現物・現実）に基づいた思考と行動、そこから会得できた成果と達成感、そして仲間と企業と教員に対する感謝の気持ちを修得できたのではないかと判断している。

これに対して下位グループは、第6位が「⑤学習のために相応しい環境（教室・機器・人数など）だった」、第7位が「②教員の説明は明確で分かりやすかった」、第8位が「④授業は相応しい教材が使われていた」、第9位が「③授業の難易度は適切だった」、以上4つの評価項目であった。

それぞれの原因を究明するために、学生の定性的データ（この授業の良い点・好きなところ、授業の工夫を感じるところ、感想など）から分析と考察を試みた。

まず学習環境については、本年度は前述したとおり、全てが昼夜同時開講による授業だったため、受講者数は約90名の大クラスで授業を実施することになった。このため、教室は机と椅子が固定式の大教室を使用することになり、グループワークに適した学習環境ではなかった。また、教員のきめ細かい指導も大きなクラスゆえ、昨年度のようには行き届かず、低い評価に繋がったと推察される。

次に教員の説明については、時間的切迫が主な原因となり、学び・体験すべき教育内容を短期間に習得することを学生は求められた。少なくとも、3ヶ月間という学びの期間を確保し、計画的かつ段階的に、必要な知識と情報を学生が習得できるように指導していくことが求められる。

第3に教材については、授業中に必要に応じて、紙媒体の資料を学生に配布してきた。時間の切迫性も一つの理由であるが、欠席すると必要な資料を入手しにくくなり、学生の活動が遅延するという問題が見受けられた。これからは、配布資料を電子媒体としてWeb-Classから、いつでも、どこでも入手して学べるようなシステムにしていくべきであろう。特に学生が理解に苦しんだ单元が「提案書の作り方・書き方」であった。提案書に関するノウハウを習得するための資料・テキストの工夫と改善が求められる。

最後に授業の難易度を高く感じた原因については既に言及したが、今後の対策としては、土曜日開講を避け、昼間主（60名）は水曜日の5時限目に、夜間主（30名）は水曜日の6時限目に、それぞれ開講し、きめ細かい指導を施せるように改善をすることにした。

さらに、本授業の成果報告会に相当する「トライ・ザ・ミッション」の開催日は、10月初旬開講から数えて約3ヵ月半後の、翌年の1月下旬とし、学生が計画的かつ段階的に必要情報やノウハウを習得した上で、最終回の授業に臨めるようにしていきたい。

1-2. 「PROGテスト」の解析結果

本年度よりキャリア開発演習の授業に参加した学生に対して、その教育的効果を客観的に測定することが出来るPROGテストを実施した。PROGとは学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同開発したもので、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向、いわゆるジェネリックスキルを育成するためのプログラムである。

このジェネリックスキルは、知識を活用して問題を解決する能力に相当する「リテラシー」と、経験を積むことによって身につく行動特性に相当する「コンピテンシー」から成り立っている。PROGテストは、リテラシーとコンピテンシーの両面から実践力を客観的に測定することが出来ることが特長である。

また、ジェネリックスキルは、経済産業省が打ち出す「社会人基礎力」、中央教育審議会が定義する「学士力」、琉球大学の新たな教育目標として取り組んでいる「URGCC目標」、さらに本授業の担当教員が主張される「CIS：Communication Imagination Sense」等に相当する資

質・能力であり、その育成方法に加えて評価方法の工夫・改善・浸透が求められている。

このような背景から、観光産業科学部では、本授業の学生に対する教育効果を把握するために、2回の PROG テストを実施した。1回目は本授業の受講前の測定として10月12日に、2回目は受講後の測定として12月18日に実施した。

以下は、2回の PROG テストの平均点（1回目：80人の平均点、2回目：75人の平均点）と、それぞれの「平均値の差の検定」の結果である。

「PROG テスト：リテラシー」の解析結果

	受講前の平均 プレ平均	受講後の平均 ポスト平均	ポスト平均 －プレ平均	5% : ○ 1% : ◎
総合評価	4.725	4.587	-0.14	有意差無し
情報収集力	3.40	3.773	0.37	有意差無し
情報分析力	3.375	3.64	0.27	有意差無し
課題発見力	4.013	3.88	-0.13	有意差無し
構想力	3.188	3.387	0.20	有意差無し
SPI・言語	2.988	3.533	0.55	有意差無し
SPI・非言語	3.188	3.093	-0.09	有意差無し

資料出所：牛窪潔『琉球大学キャリア開発演習授業アンケート調査解析結果』2014年。

PROG テストのリテラシーは、6つの能力について測定した。受講前に比べ受講後の得点が上回っている能力は、「情報収集力」、「情報分析力」、「構想力」、「SPI・言語」の4つであるが、いずれも平均値の差の検定では有意差は無かった。

逆に受講前に比べて受講後の得点が下回っている能力は「課題発見力」と「SPI・非言語」の2つであるが、いずれも有意差は無かった。

総合評価は、受講前の得点よりも受講後の得点の方が低い値を示しているが、有意差は出でていない。いずれにしても、リテラシーについては、本授業の教育効果は見受けられなかった。

「PROG テスト：コンピテンシー」の解析結果

	受講前の平均 プレ平均	受講後の平均 ポスト平均	ポスト平均 －プレ平均	5% : ○ 1% : ◎
総合評価	3.263	4.373	1.11	◎
対人基礎力	3.513	4.493	0.98	◎
対自己基礎力	3.7	4.587	0.89	◎
対課題基礎力	3.25	3.933	0.68	◎
親和力	3.575	4.387	0.81	◎
協働力	3.75	4.667	0.92	◎
統率力	3.113	3.987	0.87	◎

感情制御力	3.7	4.44	0.74	◎
自信創出力	3.425	4.333	0.91	◎
行動持続力	3.875	4.44	0.57	○
課題発見力	3.65	4.453	0.80	◎
計画立案力	2.85	3.373	0.52	有意差無し
実践力	3.438	4.16	0.72	◎
親しみやすさ	2.838	3.467	0.63	○
気配り	3.013	3.24	0.23	有意差無し
対人興味・共感・受容	2.813	2.733	-0.08	有意差無し
多様性理解	3.538	3.893	0.36	有意差無し
人脈形成	2.3	3.053	0.75	◎
信頼構築	3.025	3.347	0.32	有意差無し
役割理解連携行動	3.338	3.733	0.40	有意差無し
情報共有	2.913	3.6	0.69	◎
相互支援	2.513	2.72	0.21	有意差無し
相談指導・他者の動機づけ	2.675	3.36	0.69	◎
話しあう	2.338	3.133	0.80	◎
意見を主張する	2.375	2.667	0.29	有意差無し
建設的・創造的な討議	2.7	3.387	0.69	◎
意見の調整、交渉説得	2.263	2.907	0.64	◎
セルフウェアネス	3.15	4.013	0.86	◎
ストレスコーピング	2.65	2.907	0.26	有意差無し
ストレスマネジメント	2.875	3.36	0.49	○
独自性理解	2.675	3.013	0.34	有意差無し
自己効力感・楽観性	2.788	3.267	0.48	○
学習視点機会による自己変革	2.475	3.253	0.78	◎
主体的行動	2.638	3.093	0.46	○
完遂	2.875	3.00	0.13	有意差無し
良い行動の習慣化	3.388	3.613	0.23	有意差無し
情報収集	2.5	2.96	0.46	○
本質理解	2.638	3.253	0.62	◎
原因追及	3.125	2.987	-0.14	有意差無し
目標設定	2.263	2.84	0.58	◎
シナリオ構築	2.275	2.52	0.25	有意差無し
計画評価	2.425	2.613	0.19	有意差無し
リスク分析	2.175	2.427	0.25	有意差無し
実践行動	2.55	3.253	0.70	◎
修正調整	2.175	2.453	0.28	有意差無し
検証改善	3.213	3.52	0.31	有意差無し

資料出所：牛窪潔『琉球大学キャリア開発演習授業アンケート調査解析結果』2014年。

前頁の図表に記したごとく、PROG テストのコンピテンシーは、45 の能力について測定した。

受講前に比べ受講後の得点が上回っている能力は 43 を数え、その内 1 % の棄却率で有意差が出ている能力が 21、5% の棄却率で有意差が出ている能力が 6、計 27 の能力に対して有意差が出ており、コンピテンシーに対する本授業の教育効果が見受けられた。

有意差が出ている能力を共通因子ごとに整理すると、主に 4 つの因子が抽出された。

① 行動力

行動力の共通因子としては、「実践力」、「行動持続力」、「実践行動」、「主体的行動」、等の能力が有意差を示している。3 現主義（現場に赴き、現物を見て、現実的に判断する）に基づいた意思決定と行動を繰り返すことにより、最終的に、現場のニーズに適う企画書を完成せしめた学生たちの努力が伺える。下記の課題達成・問題解決力の生成・強化にもつながるが、仮説の検証は、行動すること無しには不可能であることを、殆どの学生が学び、実感し得たと判断している。

② 課題達成・問題解決力

課題達成・問題解決力の共通因子としては、「対課題基礎力」、「課題発見力」、「計画立案力」、「目標設定」、「情報共有」、等の能力が有意差を示している。明確なテーマや課題を設定し、それを紐解く仮説を設定し、必要な情報を収集・共有・活用することにより、仮説を検証するという論理的・漸進的なアプローチを展開することにより、本能力が強化されたと考える。

③ 対人力（チーム力）

対人力の共通因子としては、「対人基礎力」、「親和力」、「協働力」、「相談指導・他者の動機づけ」、「話しあう」、「意見の調整・交渉説得」、等の能力が有意差を示している。グループワークを通じてチームをリードすることと、チームをサポートすることのバランスを学ぶことが出来たこと、さらに、自身の意見を率直に述べる発信力と、常に相手の立場に立って相手の話に真剣に耳を傾ける傾聴力とのバランスを習得したことが、貴重な成果だと考えている。

④ 自己成長力

自己成長力の共通因子としては、「対自己基礎力」、「自信創出力」、「建設的・創造的な討議」、「学習視点機会による自己変革」、「本質理解」、「ストレスマネジメント」、等の能力が有意差を示している。テーマや課題を紐解くために、失敗に失敗を繰り返しながらも、チームに支えられながら、ミッションに喚起されながら、悔しさをバネにしながら、己の個性と独自性と創造性と意外性を存分に發揮し、協働の作品を創り上げゴールできた一連の意味あるプロセスが、自己成長に繋がったと考える。

総合評価としては、受講前の得点と受講後の得点の差が「1.110」を示しており、高い伸び率を示している。当然のことながら、平均値の差の検定結果は 1 % の棄却率で有意差が出ている。

以上のような分析により、コンピテンシーに関しては、本授業の非常に高い教育効果が見受

けられた。受講期間が2ヶ月という短期間にも拘わらず、これほどの成果をあげることが出来たわけであるが、本授業の授業内容と授業方法に対する改善・工夫・改良を継続的に実施し、今後も成果の定着を図っていきたい。

1-3. 学内専用のアンケート調査の解析結果

以下は、キャリア開発演習（キャリア系必修科目）の最終授業の際に実施した調査データから、本授業の授業評価として分析した結果を記したものである。

1. 学生の学習時間及び総合評価について

キャリア開発演習：学生の学習時間（分）および総合評価（5点評価）

受講年度	学習時間	理解度	満足度	教材	授業方法	授業内容	指導力
平成25年度	90.87分	4.27	4.04	3.93	4.22	4.20	3.91
平成24年度	78.42分	3.89	3.63	3.54	3.97	3.82	3.84
24&25有意P		*0.025	*0.062	*0.070			

資料出所：牛窪潔『琉球大学キャリア開発演習授業アンケート調査解析結果』2014年。

上図表は、学生の学習時間（予習・復習）および総合評価（理解度、満足度、教材評価、授業方法評価、教員の指導力）の平均値の集計結果、および平成25年度と平成24年度の各総合評価項目ごとの平均値の差の検定結果である。

全ての評価項目の平均値が、平成24年度に比べて平成25年度は良好な値を示しており、授業改善の成果が伺える。

特に理解度については、H24は3.89に対しH25は4.27に上昇しており、平均値の差の検定結果は5%棄却率で有意差(0.025)が出ている。さらに満足度と教材に関する評価も、10%の棄却率であるが、それぞれ有意差(満足度：0.062、教材：0.070)が出ており、前年度に比べて良好な評価となっている。

有意差こそ出でていないが、学習時間（予習や復習に費やす時間）が徐々に増えてきており、H25は90分を上回った。授業方法、授業内容、教員の指導力についても有意差こそ出でていないが、いずれも昨年度に比べて良好な評価結果になっており、観光産業科学部とオーシャン21と日経メディア・プロモーションで相互に取り組んだ改善努力が伺える。

課題は教材の評価と指導力の評価を「4」以上にするために、更なるFDの推進と改善・工夫・改良の努力が求められる。

1-4. 本授業の受講前と受講後の学生による自己評価について

キャリア開発演習：学生の受講前と受講後の自己評価分析（5点評価）

比較項目	開講年度			平成24年度			H24&H25 有意P
	Before	After	有意P	Before	After	有意P	
目標管理・継続的学習	2.89	3.96	.000	2.97	3.89	.000	
協調性・チームワーク	2.96	4.30	.000	2.83	4.03	.000	*0.078
価値観・倫理観	3.30	4.00	.000	3.14	3.86	.000	
コミュニケーション能力	3.11	4.22	.000	2.83	3.92	.000	*0.074
情報リテラシー能力	2.96	3.89	.000	2.81	3.61	.000	*0.077
問題解決能力	2.89	3.93	.000	2.67	3.86	.000	
専門的知識・能力	2.50	3.83	.000	2.56	3.81	.000	

資料出所：牛窪潔『琉球大学キャリア開発演習授業アンケート調査解析結果』2014年。

上図表は、下記に示した7つの質問に対して、学生の受講前と受講後の自己評価結果をアンケートに記入させ、そのデータを分散分析し、その解析結果をまとめたものである。

「受講前と受講後の自己評価」

- ①目標管理および継続的学習に関する自己評価は？
- ②協調性とチームワーク力（クラスメートと協力しながらテーマや課題を紐解くことができる能力）についての自己評価は？
- ③価値観（自分が大切にしたいと思う生き方・考え方）や倫理観（ものごとの正邪善悪を決める判断基準）を持つことに関する自己評価は？
- ④コミュニケーション能力（テーマに関する自身のオリジナリティを発信し、かつ他人の意見を素直に傾聴することができる）についての自己評価は？
- ⑤情報リテラシー能力（テーマを紐解く際に必要な情報を収集・考察・活用することができる）についての自己評価は？
- ⑥問題解決能力（ケース・スタディやテーマを通じて、問題を把握し、原因を究明し、対策を考案することができる）についての自己評価は？
- ⑦日経講座およびCIS応用研修を通じて、キャリア形成に必要な知識・情報（経済、金融、政治、経営、等）の修得およびオリジナリティ（企画・提案）の立案に関する自己評価は？

平成25年度・平成24年度とも、受講前に比べて受講後の評価得点が高くなっている。平均値の差の検定結果は1%棄却率で有意差（全て0.000）が出ている。PROGテストのコンピテンシーの解析結果でも言及したが、いわゆる社会人基礎力、学士力、URGCC目標、CIS、コア・コンピテンシー等に象徴される資質と能力が向上しており、本授業の教育的効果が見受けられる。

さらに平成25年度と平成24年度の7つの評価項目（After）に対する平均値の差の検定結果

は、10%の棄却率であるが、有意差が出ており（協調性・チームワーク：0.078、コミュニケーション能力：0.074、情報リテラシー能力：0.077）、前年度に比べて良好な結果を示している。

その他4つの評価項目も、有意差こそ出でていないが、前年度に比べて全ての項目が良好な値を示しており、授業改善の成果が伺える。

1-5. 本授業に対する学生の改善案について

平成25年度の最終講義の際に、次年度からの授業改善に向けて、学生の声を尊重するという立場から、新たに調査項目（土曜日開講について、日本経済新聞について、キャリア開発演習の授業内容について）を追加してみた。以下はその解析結果である。

「土曜日開講について」

①土曜日開講の是非について

選択肢	回答者数	割合(%)
土曜日の開講については、特に異論はない	14人	30.4%
出来れば、土曜日の開講は避けて欲しい	25人	54.3%
土曜日の開講は絶対に避けて欲しい	7人	15.2%

資料出所：牛窪潔『琉球大学キャリア開発演習授業アンケート調査解析結果』2014年。

②土曜日の開講だったことによる、他の取りたい授業（集中講義、等）登録の弊害について

選択肢	回答者数	割合(%)
該当した	9人	20%
該当しなかった	36人	80%

資料出所：牛窪潔『琉球大学キャリア開発演習授業アンケート調査解析結果』2014年。

まず土曜日開講の是非については、土曜日の開講を避けて欲しいことを望む割合が、約7割を占めており、学生の負担度の高さが伺える。このことは学生のみならず、担当教員に対しても同様であり、負担軽減施策を講じていく必要がある。

また本授業（必修科目）を履修することにより、他の授業の登録が出来ない弊害を受けた学生は、全体の20%を占めていた。土曜日の集中講義は、学生にとって有意義で魅力的な授業が多いため、履修機会を広げる工夫と改善が求められる。

以上のような考察結果より、次年度からはウィークディの曜日と時間帯で開講するよう改善を施すことにした。現時点では、昼間主コースが水曜日の5時限目に、夜間主コースが水曜日の6時限目での開講を予定している。

「日本経済新聞について」

③日本経済新聞の1日の平均読書時間について

平均読書時間／1日	42分
-----------	-----

資料出所：牛窪潔『琉球大学キャリア開発演習授業アンケート調査解析結果』2014年。

④日経新聞の難易度について

選択肢	回答者数	割合(%)
(5) 難しい	7人	15.2%
(4) やや難しい	31人	67.4%
(3) 普通	7人	15.2%
(2) あまり難しくない	1人	2.2%
(1) 難しくない	0人	0.0%

「総平均・SS」
平均値 : 3.96
標準偏差 : 0.631

資料出所：牛窪潔『琉球大学キャリア開発演習授業アンケート調査解析結果』2014年。

⑤この授業で日経新聞を今後も活用すべきかどうかについて

選択肢	回答者数	割合(%)
(5) 活用すべきだと思う	26人	56.5%
(4) どちらかといえば活用すべきだと思う	15人	32.6%
(3) どちらともいえない	4人	8.7%
(2) あまり活用すべきでないと思う	1人	2.2%
(1) 活用すべきでないと思う	0人	0.0%

「総平均・SS」
平均値 : 4.43
標準偏差 : 0.750

資料出所：牛窪潔『琉球大学キャリア開発演習授業アンケート調査解析結果』2014年。

昨年度（平成24年度）より、キャリア開発演習の授業を通じて、日本経済新聞を教材とする「日経講座」を提供している。学生のキャリア形成ならびに一連の就職活動を効果的に進めていくためには、企業や社会の動きを知る情報源が不可欠となる。本学部ではその情報源として日本経済新聞を取り上げ、就職活動に必要なニュースの見方、新聞記事の効果的な読み方、業界・企業・職種研究の進め方等を、学生がこの日経講座をつうじて、自律的かつ意欲的に学ぶ機会を提供している。

なお、日経講座の主な授業内容は以下のとおりである。

第1回目：日経新聞の基本的な読み方・活かし方

第2回目：そもそも「経済」とは何か？

第3回目：さまざま「業界」・「職種」を知る

第4回目：「良い会社」を見分けるコツ

第5回目：金融業界から分かる今後の経済

第6回目：文書の書き方講座

第7回目：スクラップブック発表会（学生による成果報告会）

上述したアンケート調査結果によれば、学生の1日当たりの新聞を読む時間は平均42分となっており、「1日、少なくとも30分以上は新聞を読むこと」とオリエンテーション時に指示した目標はクリアしている。さらに、今後も本授業で日経新聞を活用すべきか否かの問い合わせに対

しては、約90%の学生が継続的活用を望んでいる。

ただし、平成26年度からの日経メディア・プロモーション（MP）及び日本経済新聞社の方針により、これまで日経講座の教員として招聘してきた日経MPの専属講師の沖縄への派遣が取りやめになってしまった。さらに、日経新聞の購読料金が、90名（3ヶ月間）の受講で約120万円程度必要になり、予算的な面でかなりの負担を強いられている。このような理由から、日経講座を本授業から分離・独立させ、平成27年度よりスタートする「サテライト・イブニングカレッジ構想」の1科目として、開講することにした。

「キャリア開発演習の授業内容について」

最後に本授業を受講した学生の負担度と、本授業の応しい構成内容に対する学生の希望を踏まえ、次年度からの改善施策を提言してみることにする。

⑥本授業（10月～本日迄）を受講した学生の負担の度合いについて

選択肢	回答者数	割合(%)
(5) 負担を感じた	32人	69.6%
(4) やや負担を感じた	10人	21.7%
(3) 普通	3人	6.5%
(2) あまり負担は感じなかった	1人	2.2%
(1) 負担は感じなかった	0人	0.0%

資料出所：牛窪潔『琉球大学キャリア開発演習授業アンケート調査解析結果』2014年。

「総平均・SS」
平均値：4.59
標準偏差：0.717

⑦本授業の内容構成について

選択肢	回答者数	割合(%)
現状（これまで）の授業内容でOKである	8人	17.8%
日経講座とCIS講座を分離した方が良い	32人	71.1%
CIS講座のみにした方が良い	5人	11.1%

資料出所：牛窪潔『琉球大学キャリア開発演習授業アンケート調査解析結果』2014年。

まず、学生の負担度については、90%を超す学生が、本授業に対する強い負担を感じている。さらに、5点反応尺度での総平均の値も4.59と非常に高い負担の度合いを示している。

授業時間数も補講等を含むと、30時間近くを費やしており、2単位の授業としては加重負担となっていることは否めない。ただし、本授業の内容構成として、日経講座とCIS講座を分離した方が良いと答えた学生が7割以上を占めているが、日経講座のみを本学部の専門科目として開講することはできない。さらに、次年度より水曜日の5時限目と6時限目に開講することが決定すれば、15回の授業時間内に2つの講座を提供することは物理的に不可能である。

改善施策としては、前述したとおり次年度より本授業はCIS講座のみに絞り、日経講座は平成27年度4月から開講予定の「サテライト・イブニング・カレッジ構想」の中に組み込むことにした。

第2章 英語による専門科目の評価について

本章では、平成22年度・23年度・25年度に実施した英語による専門科目の授業として、中小企業経営論（主な内容はマクロ環境分析）を取り上げ、アクティブラーニングの効果を検証した。

分析に使用するデータとしては、2種類のアンケート調査結果（①毎回授業終了後に実施した調査、②最終授業の際に実施した調査）および成績原簿のデータを用いた。

なお、本章の分析と考察に使用する研究資料（出典先）は、牛窪潔『琉球大学観光産業科学部 学部内FD報告書：英語による授業の評価・分析方法』2014年、に基づくものである。

2-1. 授業に対する満足度と理解度について

表－1 中小企業経営論（英語による授業）の満足度（5点評価）調査結果

授業回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	平均
H22 前期	4.39	4.47	4.62	4.65	4.71	4.67	4.27	4.65	4.81	4.66	4.75	4.47	4.68	4.94	4.62
H22 後期	4.76	4.80	4.77	4.64	4.74	4.71	4.84	4.71	4.84	4.74	4.85	4.71	4.82	4.93	4.78
H23 前期	4.44	4.66	4.61	4.59	4.59	4.63	4.68	4.50	4.81	4.58	4.73	4.67	4.75	4.74	4.64
H25 前期	4.35	4.50	4.60	4.53	4.48	4.54	4.72	4.68	4.83	4.66	4.68	4.61	4.84	4.92	4.64

※5点反応尺度によるアンケート調査：5.満足 4.やや満足 3.普通 2.やや不満足 1.不満足(理解度も同様)

表－2 中小企業経営論（英語による授業）の理解度（5点評価）調査結果

授業回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	平均
H22 前期	4.06	4.26	4.47	4.47	4.39	4.31	3.97	4.24	4.52	4.23	4.50	4.32	4.53	4.81	4.36
H22 後期	4.27	4.51	4.51	4.43	4.52	4.49	4.56	4.56	4.60	4.42	4.64	4.33	4.62	4.87	4.52
H23 前期	4.05	4.23	4.16	4.03	4.22	4.37	4.49	4.34	4.58	4.19	4.40	4.23	4.53	4.63	4.32
H25 前期	3.58	4.07	4.20	3.97	4.03	4.04	4.53	4.52	4.73	4.34	4.45	4.26	4.81	4.84	4.31

資料出所：牛窪潔『琉球大学観光産業科学部 学部内FD報告書：英語による授業の評価・分析方法』2014年。

表－1と表－2は、平成22年度前学期（昼間主）、平成22年度後学期（昼間主）、平成23年度前学期（夜間主）、平成25年度前学期（夜間主）に開講した「中小企業経営論（英語による授業）」において、授業終了後に毎回実施したアンケート調査結果（満足度・理解度の各平均値と総平均：右端）である。

目標値は「4.5」とした。満足度については、目標をほぼクリアしたと判断している。理解度についてはH22後学期は目標値（総平均：右端の値）をクリアしたが、H22前学期、H23前学期、H25前学期は目標値に達していない。ただし、4未満の値（下線）は3回のみであり、理解度についても概ね良好な結果となっている。また理解度については、授業の中盤から後半に向けて上昇するトレンドを示しており、英語学習の継続的努力に対する成果が見受けられる。

昼間主については、H22前学期に比べH22後学期は、満足度・理解度ともに向上しており、

FD等を通じた授業改善の傾向が見受けられる。

夜間主については、H23前学期に開講したが、H22後学期の昼間主と比べた場合、総じて低い値を示している。主な原因として、英語に関する能力差（GTECスコアに有意差有り）、夜間主は英語による専門科目を選択必修化していない、社会人入試に英語を含めていない、等が考えられる。

平成25年度も夜間主を対象として開講したが、登録者総数35名に占める夜間主コースの学生は8名であり、残り27名は昼間主コースの学生であった。登録者数から判断しても、昼間主に比べ夜間主の学生は英語に関する苦手意識が伺える。

2-2. 単位取得状況・テストの結果・成績について

表－3 中小企業経営論（英語による授業）の単位取得状況・テスト結果・成績状況

授業回数	登録者数	単位取得者	取得率	クイズ1	クイズ2	クイズ3	クイズ4	総合評価
H22 前期	35人	33人	94.3%	86.21	90.78	90.32	89.55	87.44
H22 後期	51人	51人	100%	91.29	92.02	85.41	86.37	89.22
H23 前期	43人	39人	90.7%	84.21	90.64	83.08	87.14	82.60
H25 前期	35人	33人	94.3%	76.32	90.73	88.53	85.90	87.34

資料出所：牛窪潔『琉球大学観光産業科学部 学部内FD報告書：英語による授業の評価・分析方法』2014年。

表－3は、上述した過去4回にわたり開講した中小企業経営論の学生の単位取得状況、クイズの結果（平均点）および総合評価（平均点）である。

単位取得状況については、どの学期も90%以上の学生が単位を取得している。ただし、夜間主（H23前学期）の単位取得率が低い傾向にあるが、その主たる原因是、単位を落とした4名のうち2名は社会人学生であった。平成25年度も単位を落とした2名中1名は社会人学生であった。

クイズの成績については、それぞれのクイズの平均値が85点～90点という高得点を示しており、クイズの難易度から判断した場合、良好なスコアとなっている。

総合評価（クイズ成績：4割、出席点：6割）については、どの学期も平均80点を上回っており、学生の前向きな努力が伺える。また、総合評価に関する昼間主と夜間主の間に有意差は無かったが、社会人学生の成績が相対的に低い傾向を示している。

2-3. 学生の学習時間及び総合評価について

表－4は、最終授業の際にアンケート調査を実施し、学生の学習時間（予習・復習）および総合評価（理解度、満足度、教材評価、授業方法評価、教員の英語力評価）の平均値の集計結果である。

表－4 中小企業経営論（英語による授業）：学生の学習時間（分）および総合評価（5点評価）

授業回数	予習・復習時間	理解度	満足度	教材	授業方法	英語力（教員）
H22 前期	41.47 分	4.03	4.41	4.29	4.32	4.15
H22 後期	59.30 分	4.16	4.63	4.65	4.77	4.67
H23 前期	70.91 分	4.12	4.61	4.45	4.42	4.33
H25 前期	69.11 分	4.14	4.54	4.32	4.61	4.54

資料出所：牛窪潔『琉球大学観光産業科学部 学部内 FD 報告書：英語による授業の評価・分析方法』2014年。

特に予習や復習に費やす学習時間が徐々に増えてきており、H23 前学期は 70 分を上回った。学生にはシラバスおよびオリエンテーション等を通じて、毎回 2 時間の学習を指示しているが、その目標には到達していない。平成 25 年度のデータでは、1 回の予習・復習に費やす時間が 30 分以下と答えた学生が 10 名（単位取得者 32 名中）であった。対策としては、2 時間の事前学習を登録の条件とすることと、英文レジュメに記載されてある「Question」に対する「Answer」を必ず事前に考え・レジュメに記載してくるよう、指示することにする。

教材については、テキストおよび講義用レジュメとも、自作の教材を使用している。各授業が終了するごとにリフレクションシートに反省点と改善施策を記載しており、それをもとに、各教材への加除・訂正を施している。

授業方法と教員の英語力向上施策については、あくまで受講生の英語力をベースに、現在の方法（30 分日本語で解説した後、残りを英語で講義する）は踏襲する予定である。教員の英語力については、英語力向上に向けた独自の啓発プランを継続的に実行するとともに、授業前の練習時間の確保が課題となる。

2-4. 本授業の受講前と受講後の学生による自己評価について

表－5 中小企業経営論（英語による授業）：学生の受講前と受講後の自己評価分析（5点評価）

開講年度 比較項目	H22 前期			H22 後期			H23 前期			H25 前期		
	Before	After	有意 P									
英語学習の必要性・重要性	3.39	4.55	.002	3.34	4.49	.000	3.43	4.37	.017	3.43	4.46	.000
英語学習の継続的努力	2.29	3.55	.000	2.56	3.66	.012	2.36	3.83	.092	2.57	4.04	.000
英語能力（読む能力）	2.52	3.32	.000	2.39	3.56	.015	2.56	3.58	.726	2.75	.71	.000
英語能力（聴く能力）	2.42	3.13	.000	2.29	3.51	.001	2.61	3.72	.019	2.54	3.64	.000
英語に対する好感度	2.97	3.97	.000	2.80	3.90	.000	3.50	4.19	.000	3.71	4.32	.009

資料出所：牛窪潔『琉球大学観光産業科学部 学部内 FD 報告書：英語による授業の評価・分析方法』2014年。

表－5は、最終授業の際に実施したアンケート調査結果（過去4回分）を下に、下記5項目に対する学生の受講前と受講後の自己評価結果を分散分析し、その結果をまとめたものである。質問内容は以下のとおりである。

「受講前と受講後の自己評価」

- ①英語学習の必要性と重要性に関する自己評価は？
- ②英語学習に対する継続的努力の自己評価は？
- ③読む力（Reading-skill）：英文を読んで理解する能力の自己評価は？
- ④聴く力（Listening-skill）：英語を聴いて理解する能力の自己評価は？
- ⑤英語を学ぶことが好き（楽しい）ですか？

対応ある母平均の差の検定結果としては、H23前学期の英語学習の継続的努力と英語能力（読む能力）以外は、すべて有意差が出ており、受講前に比べて受講後の値が高くなる傾向を示している。

また、受講後の自己評価得点で4以上のスコアが年度ごとに増加してきており、英語学習に関する学生の意識・意欲・興味の度合いが高まっていることが伺える。

2-5. 今後の課題

①効果的な授業方法・授業内容について（アクティブラーニングの活用法を含む）

本授業では、ケース・スタディに対する質疑応答、毎回の授業のQ&Aによる質疑応答、そしてグループワーク（設問をグループで考える）、以上3種類のアクティブラーニング手法を用いている。今後は、学生によるプレゼン（英語による）と、それに対する質疑応答（英語）を授業に組み込んでいく予定である。

②成績の評価基準と評価方法について

成績評価は、レポートの内容、4回のクイズの成績、出席点、以上3つの評価結果を総合して得点化しているが、今後はループリック等を作成し、成績評価の妥当性を検討し、実施に移していくきたい。

③能力別クラス編成の必要性について

本授業は英検2級レベルの英語力を有する学生を対象に教材を開発し使用している。授業では、教員が各チャプターの概要を解説した後、Q&A方式により各設問を教員が質問し、学生に答えさせる形で授業を進めている。本授業の課題としては、上級者にとって物足りなさを感じるし、初心者にとってドロップアウトしてしまう学生もいる。対策の一案として、初級レベルのクラスと上級レベルのクラスの新設案を、今後学科会議等で提案・検討していきたい。

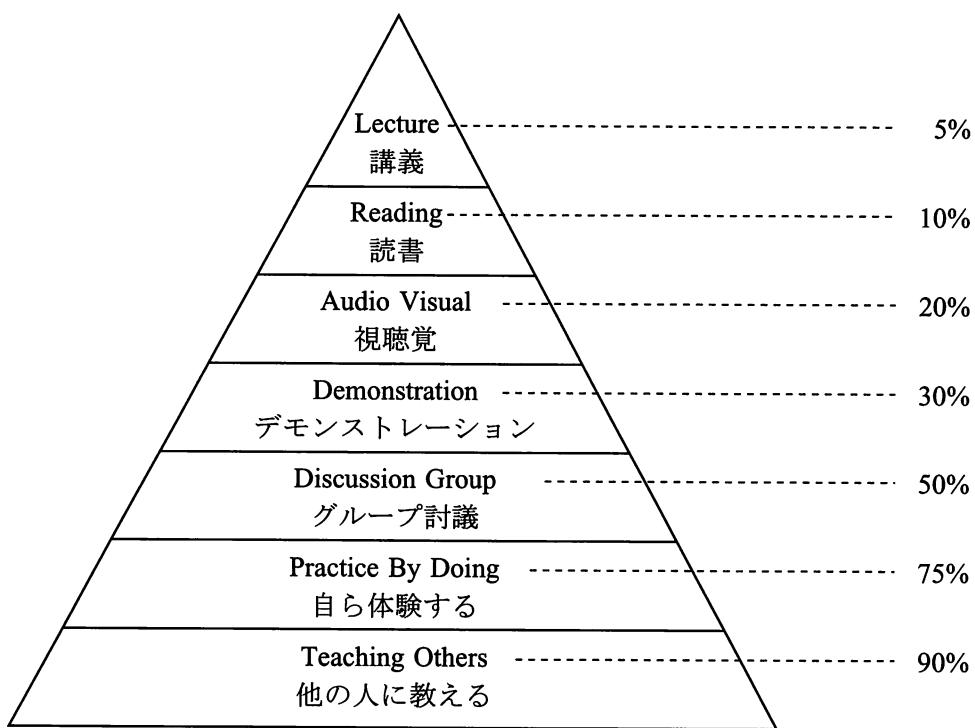
④初級レベル（社会人学生・平均以下の英語能力）の学生に対する指導法について

上述したとおり、初級レベルの受講生には、質問や相談に応じ、個別指導を施してきたが、配布資料（英語版テキストと日本語版テキスト）の活用方法を、今後はより丁寧に説明し、予習復習の効果的な方法を指導していくことにする。

⑤学生の学習意欲向上施策および予習・復習時間（学習時間）を増やすための施策について

予習の際に、英語版レジュメに記載してある設問（毎回の Question が約 20～30 記載されている）に対する自身の答え（Answer）を必ず考え、ノートやレジュメ等に記載した上で、授業に臨むことの周知・徹底を図ることにする。加えて、2 時間以上の予習時間を確保することを登録の条件にすることとする。

結びにかえて



Adapted from NTL Institute for Applied Behavioral Science

資料出所：『National Training Laboratories の平均学習定着率調査』

このラーニング・ピラミッドは、アメリカの National Training Laboratories が平均学習定着率を調査・モデル化したものであり、受講後半年が経過した段階で、どの程度、学習した内容が記憶として定着しているかを、7つの学習方法別に分類・比較したものである。

上図に示したごとく、記憶の定着率は、「講義」が 5%、「読書」が 10%、「視聴覚」が 20%、「デモンストレーション」が 30%、「グループ討議」が 50%、「自ら体験する」が 75%、「他の人に教える」が 90%となっており、ラーニング・ピラミッドは下にいくほど、アクティブラーニングの要素が強まってくる。

大学の専門科目では、知識・情報・技能を習得するうえで、講義や読書による学習は当然のことながら、必要な学習方法であることは否めないが、それらを記憶や自身の能力として定着させていくためには、アクティブラーニングの導入と効果的実践は必要不可欠と言えよう。

本稿では、産業界 GP のアンケート調査結果、PROG テストの結果、キャリア開発演習の URGCC 目標の達成度合い、英語による専門科目の URGCC 目標の達成度合い、すべてにおいて

て、アクティブラーニングの効果を検証することができたが、このことは、座学による学習（講義や読書）の必要性と重要性を軽視しているわけではない。むしろ知識・情報・技能とジェネリックスキルとの融合を軸に、アクティブラーニングを効果的に実施し、学生の成長に寄与することが、最も重要な教育指針であると考える。

本稿は、アクティブラーニングの効果に関する一考察に過ぎないが、学習者中心の教育を基本理念とし、「教員が何を教えたか」ではなく、「学生が何ができるようになったのか」を判断基準とする、教育内容と教育方法の改善に向けた取組みと研究を引き続き推進していくことにする。